批評・紹介

南宋初河北新道教考　陳垣撰

輔仁大學叢書第八

四六倍判一一一頁　民國三十年十二月

輔仁大學發行　價　貳元五角

支那をよりよく理解するには、本來かの地に於て發生し發展して、然も根强く漢人社會に浸透してゐる民族信仰「道教」の研究が不可缺の條件として切に要請されることは、何人も等しく痛感するところであるが、それが比較的に等閑に附せられてゐる學界の現狀は、支那研究の他の部門に於ける顯著なる成果を思ふにつけ、一抹の物足りなさを感ぜしむるものがある。今、民國の碩學陳垣氏が輔仁大學叢書第八として、道教に關する新研究を發表されたことは、かゝることへの反省を更に促すものとして意味深く思はれる。

さて、陳垣氏が云ふ南宋初河北卽ち金・元統治下の北支那道教界の樣相は、道教史上、革命的意義をもつ重要且興味深いところであつて、當時は、江南が漢代以來の傳統を誇る正一教であつたに反して、北支那には、全眞教・太一教・眞大道教の新宗派が勃興し、其等が急速なる教線の擴張をなしつゝあつた時代である。云はゞ近世道教の黎明期であつた。然るに、かゝる重要な時期及び注意すべき新宗派に就いての本格的研究は、從來、遺憾ながら殆んど顧みられることなく、就中、北支那道教界を風靡するに至る最重要な全眞教に就いてさへも、金蓮正宗記・祖庭內傳・七眞年譜・甘水仙源錄等の如き元代道士の撰にかゝる資料以外には、僅かに淸末陳友敎の長春道敎源流考があるに過ぎない有樣、で然もこの書たるや、全眞敎道士の傳を單に羅列したものであつて、その全貌を組織立てゝ明瞭にされたものでないことは、この方面に關心をもつものをして、甚しく空虛を感ぜしむるものであつた。かゝる點に着眼して、全眞教のみならず、これまでは、一般に元史釋老傳の簡單な記載によつてのみ理解されてゐたにすぎない眞大道教・太一教に就いても、精緻なる研究をなされた氏の炯眼と努力に、先づ敬意を表さねばならぬ。

本書は四卷より成る。前二卷は全眞教後、二卷が眞大教と太一教とである。書中、單に道教側の資料のみならず、廣く諸種の文集を涉獵し、殊にこの種の研究に無二の重要資料たる金石文を縱橫に驅使して博引旁證至らざるなき豐かな學識は、讀者の第一に感嘆するところであらう。その論旨に於ても、敬服にたへざるもの多く、特に新宗派が宋の遺民によつて創始されたこと換言すれば異民族の金朝治下の漢人によつて創始されたことに特に留意しつゝその起原を說明せられてゐることは筆者の最も贊意を表したいところである（支那佛教史學四・一所收拙稿全眞教發生の一考察參照）。又、全眞教に就て、教徒の實踐を重んぜしこと婦女の信者の多かつたこと等を指摘し强調されてゐることは、該教の性格を鋭く突いてゐることと認めたい。

然れども、本書によつて全眞教に關するすべての問題が解明されてゐるといふわけではない。殊に該教の教義的性格に就いては、殆んど說明されるところがない。教義を論するならばそ

れは佛教特に當時支那全土に弘布してゐる實踐教禪宗の影響を多分に受けたものであることに注意すべく、又思想界の一般的傾向たる三教（儒・道・佛）調和の考へ方によつてゐることも忘れてはならない。細部の論證に就いても首肯し難き點がないでもない。例へば、元の憲宗より世祖時代に亙れる激烈なる道佛の論諍（實は全眞教と佛教との論諍）を河北に於ける二教の地盤爭ひ――金元の交代期に於ける全眞教の教線擴張、これに對する佛教徒の反擊――と見ることには贊意を表するも、憲宗八年に於ける論議に敗北の結果、全眞教道士樊志應・申志貞・李志全等十七人が上都龍光寺に於て落髮せしめられたと云ふ至元辯僞錄の記載は信ずべきでない（頁四九）といふ氏の論旨は首肯し難い。氏の理由とするところは、此等三人の墓誌銘・道行碑等に見ゆる傳に落髮の事實なきのみならず、すべて彼等が教養高かつたこと、特に樊志應の如き至元二十二年以後大都に幽棲して當時の一流名士と交游し、辯僞錄の成つた至元二十八年よりも數年後の元貞元年に漸く卒してゐると云ふことなどである。辯僞錄が杜撰なものであることは認めるにしても、かゝる理由のみで落髮の事實までも否定するわけにはゆかぬ。

憲宗八年道佛論議の直後より、蒙古は南宋討伐の大軍を起して憲宗は勿論忽必烈も征旅にあり、且其後憲宗の陣中死歿後は忽必烈と阿里不哥との數年に亙る對立抗爭があつて、道佛確執の問題は暫く顧みられない情勢にあつたのであつて、從つて落髮して僧となされし道士等も其間に全眞教に復歸したものと考へられる。從つて至元年間彼等がなほ道士として存在してゐても不思議ではなく、以て落髮の事實を否定するわけにはゆかぬ。又、その傳を美化すべき性質の墓志銘・道行碑が避けて記さないのは至極當然であり、長春道教源流すらこの點を指摘してゐる程である。

落髮の事實は虞集の佛國普安大禪師塔銘にも見えてゐることである。

右は單に一事を指摘したにすぎず、なほ他にもこの種のことないでもないが、冗長を恐れて略することとし、たゞ次のことを一言したい。

それは、氏の筆致が全體から見て全眞教・太一教・眞大道教等の新宗派に對して、同情的好意的であり、その優れたところを稱揚するに努められてゐることであるが、これ恐らくは、此等新宗派が宋朝遺民の創始したものであることに氏が特別の感覺をもたれたが爲めであらう。なる程、創始期の全眞教々團には信仰の熱烈さと教徒の眞摯さとを認めねばならぬが、長春眞人に統率された後の該教團の動向には、必ずしも、然りとばかり云へないものがある。

されど、ともかくも本書が道教史研究に新しい領域を開拓された名著であることには、何の異議もない。本書を手引として、今後、支那近世道教史の研究が一段と進められんことは、筆者のみの願望ではあるまい。なほ、量少しとは云へ、既にこれまでに我國にも常盤博士等の全眞教に關係ある論作があるが、本書に一言もふれられてゐないのはやゝ遺憾である。〔野上俊靜〕